

Bangladesh南西部におけるオニテナガエビ養殖の実態に関する研究

—在地適応の視点から—

平成 19 年入学

派遣先国： Bangladesh人民共和国

水澤 純人

対象とする問題の概要

研究テーマとしているオニテナガエビとは、主に Bangladesh南西部で行われている輸出向け淡水



写真 1. 養殖されているエビ(右がオニテナガエビ, 左がブラックタイガー)

性エビのことである。オニテナガエビ養殖は伝統的な稲作より高い収益が見込めることから、多くの農民が近年養殖事業に参入するようになってきている。その結果、水田の養殖池への転換が進み、稲作を生業としてきた農村社会は、その生業形態に加えて、雇用や土地所有条件といった社会経済構造も変化してきている。また、エビ養殖は生産現場だけでなく、様々な資材(飼料、薬剤)やエビの加工・流通といった一連のプロセスを伴うことで初めて成立するものである。そのため、養殖を通じたネットワークは農村社会の枠を超えて広がっており、それはより広い範囲で地域の社会経済構造全体の変化をもたらしている。

研究目的

本研究は、地域の社会経済構造の変化を、様々なアクター(行為主体)の関わりから浮き彫りにすることを目的とする。従来のエビ養殖研究では、農民が



写真 2. 養殖池(クルナ県)の外観

国家や企業家による養殖開発を受け入れるという見方が強く、農民自らが主体的に養殖に働きかける営みについて着目されることが少なかった。しかし、本研究が対象としているエビ養殖では、農民自らが稲作からエビ養殖への転換を進めており、従来の生業形態で培った技術や制度を何らかの形で生かし、養殖業に適応させていると考えられる。そこで農民の在地の技術・社会経済システムを基盤とした養殖業への適応状況を把握するために、今回の調査では、エビ養殖の実態を養殖現場の視察と質問表による農民へのアンケートを行った。

フィールドワークから得られた知見について

養殖場と養殖関連の産業(餌の加工, エビの加工工場)を約 10 日間かけて視察した。視察地域は, バングラデシュ南西部のクルナ県とシャトキラ県の二箇所である。まず, クルナ県の養殖池を視察した際, 目を引いたのは池の周囲に様々な樹木(パパイヤ・ニーム他)やつる性の野菜(マメ科)が植栽されていることである。

このような土地利用は, バングラデシュ村落の屋敷(バリ)内でも見られ, 希少な土地を最大限活用することによる生計手段の多様化とリスクの低減の試みが伺える。しかし, 植栽できる密度には限りがあり, どちらかという自家消費という印象を受けた。また, クルナ県では植栽している植物の種類や密度は池ごとにばらつきがみられた。それに対して, シャトキラ県では樹木の植栽はほとんど見られなかった。このことから農民個々人の必要性や工夫, 生態環境の違いが養殖景観の差異を生んでいることが窺える。

また, 使用する餌についても両県では大きな違いが見られ, クルナ県では自家調合した穀物やシャムックと呼ばれる野生の貝が使われており, 村落に行くと, あちこちでエビの餌となる貝を(主に)女性や子供が剥いている現場が見られる。それに対し, シャトキラ県では市販の配合飼料や尿素, リン酸を用いていた。これは, 稲作の施肥の方法を適応した結果であると推測される。

以上を踏まえた上で養殖業の現状をまとめると以下の三点のことがいえる。まず一点目は, 養殖方法・技術には地域ごとに大きな差異が見られること, 二点目は, 方法・技術は, 既存のもの適用あるいは改良の結果であるという可能性が高いこと, 三点目は, 養殖業は, 農民のみならず, 地域社会全体が関わる中で進行していることである。

今後の展開・反省点

社会経済状況や生態環境の違いを踏まえ, 養殖方法と技術に関する地域ごとの差異の要因を明らかにしていきたい。また, 今回は現地視察に割く期間が短く, 農民への聞き取りが不十分なものとなってしまった。今後は, 聞き取りと共に農民の行動を観察することで, 在地適応の可能性をより実証的に考察していきたい。



写真 3. シャトキラ県の養殖場



写真 4. 貝(シャムック)の剥き取り作業